

筆道資料の探訪

筆の伝来



わが国に毛筆が伝来した時期がいつのことか明確にわかっていない。しかし、今から約千七百年前の応神天皇の御世に百濟から王仁が論語十卷・千字文十卷(漢字)を携えて来朝した。この漢字の渡来と共に毛筆も伝来したのであろうとの説があ

る。当時は我国ではまだ筆を製造することは出来ないで、朝廷に「御筆司所」と称する所を設けて中国の筆を取り寄せていたと思われる。

これら伝来の筆が、どの様なものであったかは、実物が残っていないので明らかでない。熊野町史に、

『古代、わが国では筆を造る技術集団が存在し、それを統率する筆氏かみうぢという豪族がいた。推古天皇十八年(六一〇)高句麗の嬰陽王が絵具・紙・墨の製法に熟達している墨徴という僧侶を派遣している。』

要するに高級製紙法・製墨法の伝来を示しているわけで、それにとまって高級製筆法が必要となるのも自然のなりゆきである。

本格的かつ多量に筆の需要が伸びるのは、七世紀以降のこと、筆氏が実際に活動するのこの時期以降であろう。八世紀に活躍していた筆氏

三百二十年ごろの
聖武天皇の板刻

其母孃而不用之便問之曰汝
前來時被母教勅好衣美食日
照明鏡其事云何御可說之見

聖德太子の板刻

遺 七 寶 籙 樹 常 有 華
廣 寶 被 國 洪 善 獲 志 念

として「正倉院文書」に天平勝宝年間(七四九〜五七)に筆ふで浜成が東大寺写経所において經典の書写にたずさわっている」と記されている。

上古から奈良東大寺を中心とした南都六宗の写経に筆がおおいに貢献していたのである。